
【追憶の雫】

柚季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【追憶の雫】

【Z-1-ア】

Z3893C

【作者名】

柚季

【あらすじ】

雨は嫌い。貴方を思い出させるから。ねえ、だけど君は縋る
私を許してくれる?

まだ、と思った。まだ彼は私の前に現れる。

さあさあと降り始めた雨をみて溜息をついた。世界は曇気に歪んで、樹々も向いのマンションもアパートも輪郭を無くす。まだ、まだダメなんてね。

雨は嫌い。雨を好きな人が好きだつたから。

雨は嫌い。彼と付き合つた時の、お出かけした時の、別れた時の、記憶を思い出させるから。

「知哉、窓閉めて」

「なんで？」

「お願いだから……」

私は泣きそうな顔でもしてたんだろうか。慌てて窓を閉め、不安そうに眉をよせてぺたぺたと近寄つて来る君。

一人暮らし1LDKのごく普通のアパートに、一人きり。他人から見れば恋人にでも見えるのかもしれないけれど、私たちは付き合つてはいなかつた。

知哉は大学の後輩で時々家に遊びにきては、愚痴やら噂やらを聞いて、そして話していくてくれる。好意を持って接してくれるのはわかつてゐるけれど、私はまだ忘れられないんだ、彼を。

「雨、きらー？」

「大嫌い」

幸せな思い出が、幸せ過ぎた思い出が色濃く残つて、湿つた雨の香りと共に彼の残像をちらつかせる。

彼と別れて2年余り過ぎた今でも雨が降る度に、私の記憶の彼は微笑む。

「そう

理由も聞かずに寄り添つて、いつも駆走になつてゐる今日のご飯は僕が作るね。と優しく微笑む。君と過ごすのはきらいじゃないよ。むしろすこしきぐ、あたたかくて心地いい。穏やかな木漏れ日のなかお昼寝してゐみたい。

私は、君のそんな優しさに付け込んで縋つてゐるだけ。

「……ごめん、ね」

自分が酷く醜いものに感じる。どうどうと汚くて、元彼を引きつて、どうしようもなくなつてゐるバカな女。

ねえ、わかつてゐるんでしょ？ただ縋つてゐるだけだつて。

だけど、なんで一緒にいてくれると聞けない私は心底だめ。離れていくのが怖い。怖くて、怖くて、はなせない、話せない、離せない。

「なんで、謝るの？」

「ごめん」

「ねえ、僕は自分の意思で一緒にいて、美香が考へてゐる」とだいたいは理解してゐつもりだよ。美香が好きで頼つて欲しくて、それは僕のエゴでしかないんだよ？」

それは、自分を見てくれなくても一緒にいたいって言つてくれてるの？そんな報われなくて悲しいこと、わたしが言わせてるの？

「それは……」

優しそうだし、痛くもなるんだ。かくづかくづと細い針で刺されたみたい。心が、痛い。

「雨がきらこなら、聞こえなくしてあげる。思い出なんて考えらんなくしてあげる」

抱き寄せられた肩と知哉の真剣な表情に何をされるかわかついた。だけど逃げなかつたのは、哀しかつたから。

私は君のこと嫌いじゃない。嫌いじゃないって言葉はそれ以上好きにならないための予防線だつた。私は、彼を好きでいたかつたから。

閉じた瞼、重なつた唇、塞がれた耳。くちゅうりと脳髄に響いて、降り注いだのは甘い囁き。

舌を絡めとられて、口腔を荒らされる。淫らな水音は響くだけ。雨の音なんて聞こえない。思考がとろけていく。身体を君に委ねてしまひ。

どしゃぶりの思ひ出は、君との思ひ出で埋まつていくかもしだれないと、まるで雨で驅気になつた世界のようになんでこく思考のなか思つた。

離れられなくなるよ、君から。このままじや。

「忘れられないなら、忘れないでいいから。だけど、僕はアソツのこと考えらんないくらい優しくする」

それはベッドのなかの甘こペローテークのよつこ優しくて、目が眩みそうになつた。

私は忘れたかったよ。君の優しさも愛情も受け止めてとろとろに

酔つてしまつて、そうして君にも幸せをあげたいと思つていたから。できるのかな、彼を忘れなくて。

「知哉……時間、かかってもいいかな」

見つめた先には、いつものやわらかな笑顔があつて、私は何故か涙ぐんでいくのを感じていた。

雨はいつの間にか晴れていて、雲の隙間から眩しいくらいの光を降らせていて。雲が晴れて行くと澄んだ高くて青い真夏の空にいつすらと虹が浮かんでゆつくり消えた。

それを見てくれた雨がほんの少しだけ愛おしく感じて、君にそれを見つたら僕のおかげっぽいねと笑つていた。

完全に晴れ渡つた空に、私たちの未来をみた気がして、私は微笑んだ。

おわり

(後書き)

テーマが見えづらく述い文章ですが、最後まで読み進めていただき
ありがとうございました(*ーー)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3893c/>

【追憶の雫】

2010年12月14日21時25分発行